

未定稿のため無断引用をご遠慮ください

正史への挑戦

—1950 年代後半における張学良の自伝—

若松 大祐 (WAKAMATSU, Daisuke)

はじめに

- 一、張の自伝の構造
- 二、正統性の応用
- 三、正統性への配慮
- 四、正統性の援用と検証
- 五、援用の強化
- 六、正当の正統化

はじめに

張学良 (1901-2001) は 1950 年後半期の台湾において四種類の自伝を執筆した。ところで張学良はなぜ執筆したのか。本研究は、「正統性への応用」、「正統性への配慮」、「正統性の援用と検証」、「援用の強化」という風にそれぞれ定義できる張の四種類の自伝への考察を通じて、「張は自己の過去の有用性を主張するために自伝を執筆した」という結論を得た。以下で、まず張の自伝に共通する構造を提示し、そしてそれを具体的な四種類の自伝によって確認し、ここから張における「正当の正統化」という方法を導出する。

一、張の自伝の構造

自伝とは自己が自己を叙述するものである。作者と話者と登場人物との同一性について、作者が読者に対して契約しようとする構造を持つ、という見解もあるが、実際は複雑な構造をもっている。張学良の自伝には次の様な構造の存在が認められる。つまり、二人の話者が存在していて、ともに「過去の有用性」を主張する構造である。一人目の話者は過去における自己の行為の有用性を主張する。この際、話者は現在における自己の存在意義を、過去において正当な行為をしたかつての自己に求めている。これに対し、二人目の話者は過去を失敗として理解する。話者は自らの過去の失敗から得られた教訓が現在において持ち得る有用性を主張する。この場合、話者は現在における自己の存在意義を、権威によって彼の過去が失敗であると考えている同時代の人々に対して教訓を提示し得る現在の自己に、求めている。

ではこのような張の自伝の構造はどのようにして把握し理解することができるのか。本研究では、四種の張の自伝において定義された登場人物としての張の役割に注目することで、二人の話者の存在を把握し理解する。

また張の当時の生活状況への考察や、同時代の「正史」(官製の歴史)との比較を行うことによって、張の自伝が蒋介石に執筆を迫られたものであり、読者に蒋介石が特定されて

いることも判明する。

二、正統性の応用

第一の自伝「西安事変反省録」(1956-57 年)において、登場人物としての自己は、蒋介石の部下として国内統一・一致抗日の実現に誠意を以って邁進する、という役割を担っている。ここから判明するかつての自己を語る話者の立場は、過去において自己が国家に対して示した有用性を主張する立場である。また登場人物張学良は、一方で話者が正当な思想であると考えた抗日意識の強烈な人物として描かれ、同時にこの人物像に正当性を与える為に、他方で話者の同時代の正史(国民党の歴史)を応用して描かれている。話者の語りの重点は抗日にあり、正史が重点を置く国内統一は抗日の為の一過程となっている。ここでかつての自己は肯定的に描かれ、話者も積極的に語りを展開している。話者は自身が正当であると考えた自己像を、登場人物であるかつての自己に投影している。これを話者の正統的立場と呼ぶ。

他方これと異なり、話者はかつての自己や特に現在の話者自身について否定的に語ることがある。特に西安事変への回想の場面で、この話者が現れる。この際、話者は自身の過去をまず「禍」(わざわい)と見なす。ここで話者は「禍」の原因を自身の心のかつての不安定性に求め、自問自答する。そして話者はかつての失敗経験を教訓として、話者が所属する国家の現政策的政策である反共闘争のために提示する。こうして話者は、自身の過去から得た現政策的有用性を主張する。しかし、話者の語りの重点は教訓の提出より、自己省察にある。またこうした反省や教訓の提出は、作者張学良が周囲から求められている姿にほかならない。そこでこの話者は正統性や権威に対応していることから、本文ではこれを話者の正統的立場と呼ぶ。

以上より、過去の有用性を主張する二人の話者が「西安事変反省録」という自伝の中に存在していることが確認される。そして、この自伝の特徴は正統性の応用であると定義できる。しかし、作者張学良の真意は正当と正統という二人の話者のどちらにあったのか。実は両用に読めるようになっていく。いずれにせよ「西安事変反省録」という内在的に完結した一世界だけでは、判断が困難である。過去の有用性をめぐって、一方は過去(と現在)を肯定し、他方は過去を否定し現在を肯定するという矛盾の存在するのが「西安事変反省録」なのである。

三、正統性への配慮

第二の「雑憶随感漫録」(1957 年 4 月)という自伝においても、正当話者と正統話者との存在が確認される。この自伝で登場人物として描かれるかつての自己は、様々な役割を持っている。これを本研究では、観念的自己(理性主義者、良心的人物)、社会的自己(権力者の子、為政者、軍人)、ナショナリズム的自己(張家の子、東北人、中国人)、正統的自己(国民党員、蒋介石の部下)というふうに便宜的に四種類に分ける。多様な役割を担う

登場人物としてのかつての自己の行為の正当性は、多様な自己を取り巻くそれぞれの状況の情状酌量の論理によって保証される。また、一見無秩序に描かれた多元的な自己像は、「救国のため」という行動原理によって役割取得の優先順位が決定されている。救国という行動原理は一方で自己が正当とみなす抗日を意味し、他方で正史に配慮して国家統一をも意味する。話者の語りの重点は抗日にあるが、とにかく過去において自己の行為が国家に対して持った有用性を主張する正当話者はここに存在する。

他方、西安事変を語る部分でやはり正統話者が出現する。現在の話者自身が正統話者の語りの登場人物となる。ここでも失敗経験からの現在の国策（反共抗ソ）への教訓の提出は行われるが、やはり語りの重点は過失の所在探しという自己省察に置かれる。

以上より、過去の有用性を主張する二人の話者は「雑憶随感漫録」の中に存在していることが確認された。そして、この自伝の特徴は正統性への配慮であると定義できよう。正当と正統という二人の話者の関係は、基本的に前述の自伝と変わらず矛盾である。しかし正統性への対応が「応用」から「配慮」へ変わったことから、正史的要因による話者の立場への影響が希薄になったと考えられる。そこで作者張学良の真意は正当話者にあるのではないかと推測できるし、「西安事変反省録」と比較すると、こうした推測がより強まる。

四、正統性の援用と検証

前述の二自伝が、正当話者の優位を印象付けるのに対し、第三の「恭読『蘇俄在中国』書後記」（恭しく『中国の中のソ連』を讀書しての後記、1957年8月）という自伝は、逆の印象を与える。主に登場人物となるのは話者自身であり、その際彼の過去は失敗経験から得られた現在における教訓となる。正統話者の提出する団結の重要性という教訓は、現在の国策である反共抗ソという目標下での使用を目的とされる。ここで教訓の意味が自己省察の材料から国策への活用に重点が移る。従って正統話者によって語られる自己史は、正史（『蘇俄在中国』）を援用しての検証であると判明する。

他方、正当話者の存在は、かつて統一に尽力したという登場人物への言及によって確認できる。しかし自伝本文の全体的な脈絡とは独立して語られる。また前述二自伝では抗日にあった語りの重点が、ここでは統一に移っている。原因は同時代の正史『蘇俄在中国』が近代中国を「安内攘外」（第一に統一、第二に抗日）と定義したことである。このため正当話者は正統話者の脈絡に併呑されている。そしてこの自伝は正史を援用しての是非の検証と言いうる。

五、援用の強化

最後の「坦述西安事変痛苦的教訓敬告世人」（西安事変という痛々しい教訓をすっかり述べて世の人に敬して告げる、1958年）は自伝というよりも告発書である。登場人物は自らの被害体験を告発する正統話者自身である。話者は告発することで現在の国策反共抗ソに対して自己の過去の有用性を示そうとする。

他方、正当話者は存在するがほとんど本来の意味をなさない。話者はかつての自己が蒋介石を護衛する役割を十分に果たしたことに言及するだけである。ここでのかつての自己が有用性を示した国家とは、抗日や統一を必要とする国家でなく、蒋介石そのものを意味している。

従ってこの自伝の特徴は援用の強化と呼び得る。

六、正当の正統化

以上、四種類の張の自伝が、ともに正当話者と正統話者という二人の語りによって矛盾的に構成されていることを確認した。つまり、時系列的に見るならば、第一の自伝で正統性の応用と定義された両話者の関係が、第二の自伝では正統性への配慮と定義されるように正当話者を優位にさせた。しかし第三の自伝は正史の援用と検証という特徴によって正統話者の優位に方向転換し、最後の自伝でその方向は強化され固定された。こう考えた時、張は自伝において「正当の正統化」という方法を使って、過去の有用性を主張したと言える。張は、正史の正統性に対応することで、自らが正当とみなす歴史認識を正統化し根拠づけようとしたのである。本研究はこの思想活動を張による正史への挑戦と呼んだ。

1950 年代の張は正統性によって自己の語りの正当性を保証したと考えるならば、国家が個人に歴史解釈の共有を迫る戦後中国において、彼のこうした思想はどういった意義を持つのか。また、張が正統性に対応せざるを得なかった 1950 年代台湾政治空間はどのような時代だったのか。今後の探究の課題としたい。

【張学良的自伝の構造】

作者	話者	登場人物 (主人公)	
		過去	現在 (話者自身)
張学良	正当的立場	成功 (有用性) ←	愛国者
	正統的立場	失敗 —	失敗者 ↓ 教訓 (有用性)

這是未定稿，無經過作者同意，請勿引用

向正史挑戰

— 1950 年代後半張學良的自傳 —

若松 大祐 (WAKAMATSU, Daisuke)

前言

- 一、張學良自傳的機制
- 二、正統的應用
- 三、向正統的顧慮
- 四、正統的套用與驗證
- 五、套用的強化
- 六、正當的正統化

前言

張學良 (1901-2001) 在 1950 年後半期台灣，撰寫四篇自傳。那麼張要撰寫的目的是甚麼？本文是透過探討四篇張學良自傳，即可以定義為「正統的應用」、「向正統的顧慮」、「正統的套用與驗證」、「套用的強化」的四篇，而得到「張為了主張自己過去的有用性而撰寫自傳」之結論。現在擬首先提示張學良自傳共通的機制，然後將此由具體的四種自傳而進行確認，最後由此提出張學良自傳的「正當的正統化」此一方法。

一、張學良自傳的機制

所謂自傳是自己敘述自己的。據說，自傳的機制是，作者試圖對讀者進行契約有關作者、敘述者、登場人物的同一性。實際上自傳擁有更複雜的機制。本文認為張學良自傳擁有如下機制，即，有存在兩個敘述者，而且兩個都主張「過去的有用性」之機制。第一個敘述者主張在過去自己行為中的有用性。此際，敘述者將現在自己的存在意義，請求於一個曾經實行正當行為的過去自己。對此，第二個敘述者是將自己過去視為失敗。敘述者主張從自己過去的失敗經驗得來的教訓在現在所發揮的有用性。此際，敘述者將現在自己的存在意義，請求於一個向同一時代人們可以提示教訓之現在自己。同一時代人們是被權威（正統性）視為敘述者的過去是失敗的。

那麼我們如何把握而理解如此張學良自傳的機制？本文注意到在四種張學良自傳中所定位的登場人物（主角）張學良扮演的角色，由此把握而理解兩個敘述者的存在。

另外本文經過探討張撰寫的當時生活背景，而且由於與同一時代「正史」（官方歷史）的比較，來明確張的撰寫自傳是被蔣中正強迫的，而且所謂讀者是特定蔣中正。

二、正統的應用

在第一自傳〈西安事變反省錄〉(1956-57 年)中，登場人物自己扮演一個角色，即作為蔣中正的部下誠實邁進國內統一致抗日的實現。從此發現的敘述過去自己的敘述者立場是，主張在過去自己對國家表現的有用性之立場。同時登場人物張學良是作為一個敘述者認為正當思想的強烈抗日意識的人物來描述，而且為了對這些人物形象賦予正當性，同時應用敘述者同一時代正史(國民黨式歷史)而敘述之。敘述者敘述的重點在於抗日，正史所重視的國內統一是，變成為為了抗日的一個過程。在此，過去的自己是肯定地被描述，敘述者也是積極地進行敘述。敘述者將自己認為正當的自我形象投影於登場人物的過去自己。因此本文將此叫敘述者的正當立場。

與此不同，敘述者另外也有否定地敘述過去自己與尤其現在敘述者本身。這些敘述者的出現，是特別在回憶西安事變的場面。在此，敘述者首先將自己過去視為「禍」。敘述者將「禍」的原因請求於自己心裡曾經擁有的不安定性，進行自問自答。然後敘述者將過去失敗的經驗作為一個教訓，提示於敘述者現在所屬的國家的反共鬥爭政策。由此，敘述者主張從自己過去得來的現在的有用性。可是，敘述者敘述的重點是在自我省察於在提出教訓。反正，如此反省或提出教訓是，作者張學良由於周圍的他者來被強迫的形象。所以，此敘述者是對應於正統性或權威，因而本文將此叫敘述者的正統立場。

以上可以確認，在〈西安事變反省錄〉此一自傳中，有存在主張過去有用性的兩個敘述者。而且此自傳的特色可以定義為正統性的應用。可是，作者張學良的真意是在正當敘述者或在正統敘述者？實際上可以解釋為兩樣。因此只有針對〈西安事變反省錄〉一個內在完結的小世界，相當困難判斷。對於過去的有用性，一方面肯定過去(與現在)，另一方面否定過去而且肯定現在。擁有如此矛盾的就是，〈西安事變反省錄〉。

三、向正統的顧慮

在第二自傳〈雜憶隨感漫錄〉(1957 年 4 月)中，也可以發現正當敘述者與正統敘述者的存在。在此自傳中，自己是作為登場人物來被描述，而且是擁有各種各樣的角色。對此，本文方便上分為四種，即觀念性自我(理性主義者、良心人物)、社會性自我(權力者的兒子、當政者、軍人)、國族主義自我(張家之子、東北人、中國人)、正統自我(國民黨員、蔣中正的部下)。過去自己是扮演多種角色，而且自己行為的正當性是，由於圍繞多種自己的每個狀況的酌量情形的邏輯而保證。同時，多種自我形象雖然看起來是沒有秩序，但實際上是由於「為了救國」此一行動原理來決定希求角色(role expectation)的優先順序。救國此一行動原理是，一方面意味著自己認為是正當的抗日，另一方面顧慮正史而意味著國

家統一。敘述者敘述的重點在於抗日。反正在此，正當敘述者主張在過去自己行為對國家發揮的有用性。

另外，在敘述西安事變的部分，正統敘述者還是出現的。現在的敘述者自己本身變成為正統敘述者敘述的對象，即登場人物。在此，敘述者還是將從失敗經驗得來的教訓提出於現在國家政策（反共抗俄），其敘述的重點還是在於尋找過失所在，即自己省察。

以上可以確認，兩個主張過去有用性的敘述者，也存在於〈雜憶隨感漫錄〉。而且，此自傳的特色是，定義為向正統的顧慮。正當與正統的兩個敘述者的關係，還是與前一個自傳一樣矛盾性的。可是，作者對正統性的對應是從「應用」改變到「顧慮」，由此可說，正史因素對敘述者立場的影響也變成稀薄了。所以可以推測作者張學良的真意在於正當敘述者，而且若經過比較於〈西安事變反省錄〉，就更容易推測之。

四、正統的套用與驗證

如上兩種自傳給我們的印象是，正當敘述者的優勢，對此第三自傳〈恭讀《蘇俄在中國》書後記〉（1957年8月）給我們相反的印象。主要的登場人物是敘述者自己本身，此際他的過去成為由失敗經驗得來的現在教訓。如此正統敘述者提出的所謂團結的重要性此一教訓，其目的是使用在現在國家政策反共抗俄抗此一目標上的。在此，教訓的意思重點從自我省察的材料改變到向國策的活用。所以可知，正統敘述者的敘述自己歷史，是由於套用正史（《蘇俄在中國》）而驗證。

另外，正當敘述者的存在，由於敘述到曾經儘力於統一國家的登場人物，而可以確認。但是正當敘述者的敘述是獨立於整個自傳脈絡。另外在前面兩種自傳中，敘述的重點在於抗日，可是在此改變到在於統一。其原因是，同一時代的正史《蘇俄在中國》將近代中國史定義為安內攘外（先統一、後抗日）。因此正統敘述者的敘述脈絡併吞正當敘述者。此自傳的特色可說是套用正史而驗證自己是非。

五、套用的強化

最後的〈坦述西安事變痛苦的教訓敬告世人〉（1958年），或許也不是自傳，而是告發書。登場人物是告發自己受害體驗的正統敘述者自己本身。敘述者嘗試由於告發，而將自己過去的有用性標示於現在國家政策反共抗俄。

另外，正當敘述者雖然有存在但是幾乎沒有發揮本來意義。此敘述者只敘述，過去自己曾經扮演了在西安事變場面保護蔣中正之角色。在此，過去自己的表現有用性的國家，就不意味者是需要抗日或統一的國家，而意味者是蔣中正本身。

從而此自傳的特色，可說是套用的強化。

六、正當的正統化

以上已經確認，四種張學良自傳都是由於正當敘述者與正統敘述者，來擁有矛盾而構成的。就是說，以時間的循序來看，兩個敘述者的關係在第一自傳定義為正統的應用，其次在第二自傳就定義為向正統的顧慮，而正當敘述者優勢的。但是在第三自傳中，由於正史的套用與驗證的特色來改變為正統敘述者的優勢。最後自傳中，其傾向更強化而且固定的。總之可說，張學良在自傳中使用「正當的正統化」此一方法，來主張自己過去的有用性。張學良就是，由於對應正史的正統性，而將自己認為是正當的歷史認識，進行正統化而且鞏固其正當性基礎。所以本文將此些張學良思想活動，叫張學良向正史的挑戰。

1950 年代張學良根據正統性來保證自己敘述的正當性基礎，那麼在國家對個人強迫認同官方歷史解釋的戰後中國時空上，張的如此思想有甚麼意義呢？另外張不得不對應正統性的所謂 1950 年代台灣政治時空，到底是如何時空呢？筆者擬將此作為今後課題。

【張學良自傳的機制】

作者	敘述者	登場人物 (主角)	
		過去	現在 (敘述者自身)
張學良	正當的立場	成功 (有用性) ←	愛國者
	正統的立場	失敗	失敗者 ↓ 教訓 (有用性)